一　「西洋」対「日本」　3
二　谷崎潤一郎におけるポストコロニアリズム　5
三　東洋精神の表現者としての京都学派哲学　11
四　文明論的転移の陥穽　14
五　西洋の誕生　18
六　日本占領政策と京都学派　20
七　普遍主義の比較研究へ　23

1　「近代の超克」と京都学派

「近代の超克」と京都学派——近代性・帝国・普遍性　31　磯前順一
一　絡み合った言説——西洋とアジア　31
二　モダニティの内部と外部——外部性の探求　35
三　「近代の超克」と「世界史の立場と日本」——現在性をいかに発話するか　41
四　普遍性の両義性——帝国と植民地　49
五　他者と暴力——身体の深みから　61
座談会「近代の超克」の思想喪失——近代とその超克をめぐる対立　75　藤田正勝

一　はじめに　75
二　座談会「近代の超克」が目ざしたもの　78
三　「思想喪失」の放談会　80
四　他者としての「近代」　83
五　自己としての「近代」　85
六　下村寅太郎の「近代」　87
七　座談会「近代の超克」が果たしたもの／果たさなかったもの　91

西谷啓治と近代の超克（一九四〇―一九四五年）　95　J・W・ハイジック

一　世界における日本の再配置　96
二　脱亜入欧する日本の精神　106
三　科学的世界観の相対化　111
四　近代を超克する論理　114

2　三木清と帝国の哲学――普遍性をめぐって

東亜共同体論と普遍性をめぐって――主体的技術論序説　125　酒井直樹

一　再帰性としてのアジア　127
二　東亜共同体のアポリア　134
三　国民の人種化：国体の戦前・戦後　139

四　人種概念の変遷　145
五　人種主義進展の歴史　148
六　人種主義を歴史化するために　153

「近代の超克」と「中国革命」——戦後日本思想史における二つのモメント　163　孫　歌

一　「近代の超克」という座談会の問題性　163
二　発掘の方法：竹内好の認識論　166
三　「中国革命」：対極においての近代　169
四　毛沢東の思想：中国革命の政治性　172
五　ふたたび竹内好：近代の超克から中国革命へ　175

3　「近代の超克」と「世界史的立場と日本」——帝国の役割

「近代の超克」思想と「大東亜共栄圏」構想をめぐって　183　鈴木貞美

一　なぜ、今日、「近代の超克」を問うのか　183
二　デモクラシーがファシズムを裁く——東京裁判史観　188
三　螺旋運動というレトリック——丸山真男「超国家主義の倫理と心理」　190
四　突然変異説——丸山真男「日本の思想」　194
五　二重性論の限界　202
六　結び　206

同化あるいは超克——植民地朝鮮における近代超克論　211　金　哲
一　「日本人になること」　211
二　朝鮮・日本の地方化　214
三　「東洋人は東洋人同士で仲良く生きていくだろう」　219
四　「近代の超国」と普遍としての東洋　223

4　総合研究：日本における西洋近代の経験

近代との格闘——ジェイムズ・カズンズと日本・インド・脱植民地の文化　235　ゴウリ・ヴィシュワナータン　三原芳秋 訳
西洋の針路の喪失／東漸の終焉と脱ヨーロッパ化　265　ヘント・デ・ヴリーズ　苅田真司 訳
一　「ヨーロッパ的なもの」と「脱ヨーロッパ化」　265
二　「人生」・「運命」・「自由の奇跡」　280
三　「近代の超克」　293
四　資本再び　300
五　復讐と赦しの循環の回避　309

「西側」近代性に対する抵抗と、「東洋的」沈潜への誘惑と　321　稲賀繁美
一　二階建てモデルと「東洋」のジレンマ　321
二　媒介者の命運　323
三　トポスとしての全体と自己犠牲　324
四　異質性と同質性のあわい　326
五　山崎闇斎と竹内好　328
六　哲学の主体は西欧世界の独占か　330
七　両大戦間の東西思想論争　332
八　人間性の倫理への疑問　334
九　聖書と論語　336
一〇　浄化思想の反復脅迫　338
一一　「個」と「全体」の循環、あるいは霊の再生　340
一二　Disorientation of the Orient 東洋を見失って？：結論　342
あとがき——討議の後で　350　磯前順一
執筆者紹介